ウータン

〝HUTANゥ森の通信

No.7　1989.3.25

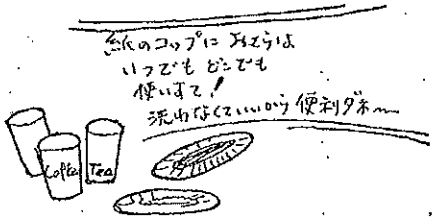
発行／　ウータン・森と生活を考える会　　郵便振替　大阪３－3880

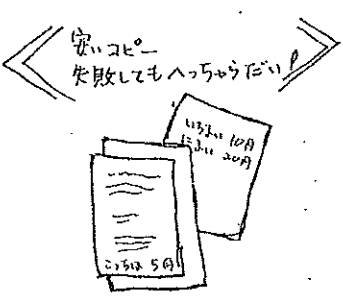
大阪市北区中崎西１－６－３６　サクラビル新館３０８

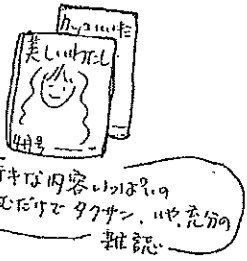
「自然を返せ！関西市民連合」事務所気付　☎ 06－372－1561

一部　¥１００

年会費¥１０００







Q：あの貴重な木はどこへ行ったのですか？

A：お答えします。

私たちのまわりの、いつでもどこでも簡単に使え、
簡単に捨てるものに姿を変えて存在しています。
もっと大事にしょうネ。

熱帯林の伐採をストップさせよう!!

森林の伐採は激しさを増しつづけて、伐採道路はさらに奥地へ延び、インドネシア国境にまで及んできていると言われています。サラワク州政府は、一九八七年十一月の最初の弾圧以降、森に住む住民が生活を守るために止むなく道路封鎖したことを違法とし、その後重い罰則規定を設けるなど、人権を抑圧する態度をとっています。それに対し、生活も文化も破壊され満足な食べ物もない先住民の人たち。

私達も無関係ではありません。日本は世界最大の熱帯林丸太の輸入国で、このボルネオ島から九〇%以上も輸入しています。先住民の人権擁護のためにも、私達の暮らしを問い直すことが必要ではないでしょうか。

森林伐採に反対するハガキや署名に協力お願いします。

三年以上にわたって道路封鎖などの方法によって、森林の破壊に抗議し続けてきたサラワクの先住民を、最近二か月の間に一二八名も不当に逮捕したサラワク州政府。

部が急伐採地

マレーシア・サラワク州主席大臣
アブドゥル・タイブ様

私は、貴州で起こっている森林破壊と一二八人の先住民の逮捕を深く憂慮しています。ブナン人らの非暴力的な道路封鎖などの抗議行動は、森林破壊等によって生存基盤と基本的人権を侵害されたことにたいする正当防衛であり、私は貴州政府が彼等をこれ以上不当に逮捕しないよう要求します。　また、貴州が制定した新しい森林法は、憲法に認められている先住民の慣習法上の権利を認めていないという点で違法であり、廃止すべきだと考えます。

私は、ブナン人ら先住民の伝統的な土地に関する権利を貴州が速やかに認め、森林保護と人権保護政策を打ち出すことを強く求めます。

サラワクで森を守る ためにたたかう人々

この何か月間に サラワク州政府のプナン族をはじめとする先住民族に対する強引な政策には一層拍車がかかってきた。昨年11月末には 再び11名が逮捕され、4月末には その数は合計33名(うち3名は釈放) 今年にはいり 1月には 105名。(現在までに入っている情報にまれば 82名居員、一応 釈放された。)

すべてこれらの人々は、1989年11月に定められた、「すべての道路封鎖は違法とする。」という法案にひっかかって、逮捕されたのである。

先住民族の森林伐採反対運動は、1987年3月頃より始まった。サラワク州バラム・リンバン川流域ロケ所でのプナンの人々の林道封鎖が 約6ヶ月に及んだ。

世界各国の環境保護団体の支援が強まるが、1989年10月の マレーシア政府の大量逮捕事件では、道路封鎖を行なった罪で96名の先住民も逮捕された。その後、州政府と先住民達との間で話し合いがもたれてはいたものの進展がなく、1989年3月頃には 各地で小規模な封鎖が開始される。

先住民族の人々は、彼らの森を、森林資源を守るために、必死の闘いをしている。

SAMのリポートによると、闘争は、絶望的になりつつあるという。乱伐により、森では 食べ物はますますなくなり、川は汚染、今や、人々の生活は困難な状態にあると言われている。また多くの働き手である男達を逮捕により失った プナンの女子供は、飢えているとも。

こういった一連の先住民の大量逮捕、裁判問題に対して、森林伐採の悪影響に対する抗議行動が 国内外の環境保護団体で行なわれている。しかし、こういった世界的な抗議行動に対して、マレーシア政府は、「マレーシアにおいて、現在行なわれている森林の伐採の状況は、生態系や、先住民の生活に何ら悪影響を及ぼすものではなく、マレーシアの森林産業は、地域の生活水準の向上に貢献しているのだ。」という報告を行なった。

地域活動グループの報告とは、まったく逆であり、マレーシア環境相も「サラワクでの河川の汚染は深刻な問題である。新道路の建設等により、土壌侵食により、新しい流域河川を汚しているのだ。」ということを認めている。

(鈴木千里)

タイからの便り(2)

"コータァーン"

はた やすのり

ウータンの年末号に、タイの大水害を伝える朝日新聞のスクラップが紹介されていました。大阪を離れたのが十一月の三十日で、その記事の掲載が十二月の一日ですから、何か不思議なめぐりあわせと言えなくもないのです。情報カットを生活の原則にしている私でさえ、この国のその後のただならぬ状況は、日増しに憤りを誘うのでした。

十二月の初めに自分の居場所を求めて、北部のチェンマイに移動しました。ここは被害のあったスラーァタニイ地方から千五百　以上も離れていて、町の様子も普段と変わり無い静けさだったのですが、到る所で募金箱を手にした子どもに出会うのでした。日本の状景とかなり違っている点は、人のおおぜい集まる所だけではなく、食堂の中にでも、路地の奥の小さな家の入口にでも、彼等は健気にも足を運ぶのでした。

「コータァーン」お金を下さい。手にしている箱には、ทำบุญ（ナァムトウアン）"洪水"と書かれてあるのが目に止まりました。ナァムトウアンの箱が、あどけない「コータァーン」の声とともに、町中を来る日も来る日も駆け巡るのでした。

大水害への救援募金の活動は、見た目にも組織化されていて、日曜日などは城壁のある広場へ、ブラスバンドを先頭にした学生の集団が、ステージで繰り拡げられるキャンペーンと呼応して、水害救援のための機運を高めるのでした。

私の手許に送られてきた記事の要旨は、スラーァタニイを中心とする十三県の被害状況が想像を越えるもので、その日までに分かった死者が四三〇人にも上り、現場を視察したチャチャイ首相も「原因のひとつは、森林の大規模伐採による人災だ」と指摘したと書いておきながら、日本の侵出企業が存在することには少しも触れないで、住民たちが不法に伐採する燃料用木材がいかにも重要な原因のような印象を与えるように結んでいます。

テレビの映像は、大水害の悲惨な実情を具体的に伝えていました。安全な場所に避難している住民の誰もが、肉親を失った悲しみを涙ながらに語るの

でした。何日たっても水が引かないので泥沼のようになった町の様子は、ブラウン管を通してでも見ている気がしなくなるほど惨めでした。

ハァチョン（五チャンネルがある）のどの放送も、まるで判を押したように、現場の報告をした後はバンコクの救援のためのイベントが生中継されるのです。金ピカの制服を着た高官らしき役人が、壇上に立って表彰状を手にしています。

何県の何々小学校は募金総計一万二千バーツ　と読み上げられると、代表の生徒が進み出て賞状を恭しく受取ります。何分ぐらいか正確には分からないのですが、この単調とも思えるテレビの番組を毎晩のように見ていて、この国の総理大臣の話を想い出すのでした。

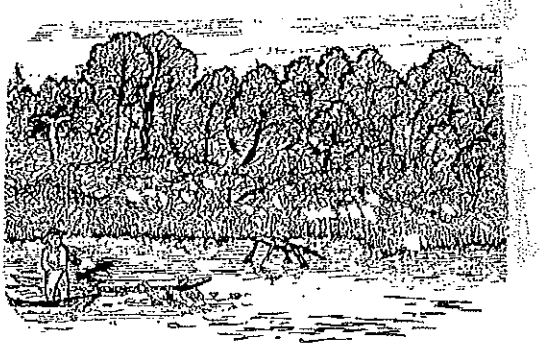
「洪水の原因は、森林の大量伐採によるものと思われる。」大量伐採が可能な経済力と、自然破壊を厭わない精神を持つ日本の企業の名称が私の見たかぎりでは、救援活動のどこにも見当らないのです。

「済みませんでは済まされない」にしても、人間の生命を大量に断ち、ブルジョア新聞が書き切れないほどの被害を現地の人におわせながら、冷徹にも日本企業は大虐殺と自然破壊に頬かぶりをしとおすのでした。

タイの権力も日本企業の人間らしからぬ非情な利潤追求と野合してか、子どものヒューマニズムを動員することだけで終わりそうな気配で、タイのマスコミとともに、侵略企業に寛大な態度を見せています。

友人のピーディもノップンも、日頃は温厚なリロックでさえも、私の指摘に対して明らかに怒りの表情を浮かべるのです。

年の終わりに町角で聞いた大水害救援のための募金活動の子どもが叫び続けた「コータァーン」とは、この国の俗語で言えば、道端で物乞いをする人たちを指すのです。タイの自然を引き裂いてまで、ぜいたくの限りを尽くしている日本への反省を求めて、一九八八年の終わりに起こった悲しい大水害の事実を、日本の商業新聞はどれほど克明に書いたのでしょうか。



奪われた大地・フィリピン(4)

～遠い手紙～

西岡 良夫

昨年九月に会ったきり、彼女からの手紙が届かない。彼女の名はリディア。僕より少し若いがややこ肥りで、色黒の顔の瞳はいつも微笑んでいる。

アジアセンターの松中さんに紹介されて、僕は昨年の三月にKAPPAG(カパッグ)を訪ずれた。リディアが所属するカパッグは、マニラ市内のスラムに住む人々の生活や人権を支えるボランティア・グループで、彼女はサンタ・メサのスクゥォターにサポーターとして住んでいる。小さなトタン屋根の家に、無職の夫と二人の子どもを抱え、母や妹夫婦と一緒だ。スラムで暮らす皆んなのために、朝から晩まで動き廻る彼女。

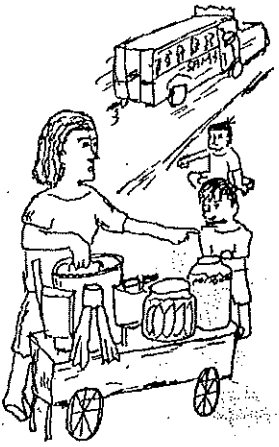
マニラで「パラ（とめて）」といえば、ロック音楽をならしたジプニーが止まる。この乗り合い自動車の中ではいつも、魚や野菜を運ぶ女たちや子どもに出会う。街角ではサンダルばきのぶらつく男たち、店の軒先でかき氷やハロハロを商うおばさん、彼等の殆どがバロン・バロンと呼ばれる堀っ立て小屋やアパートに住んでいる。それより条件が悪いのがスラムで、より経済的に貧困な人々は不法居住地と呼ばれるスクゥォターで暮らしている。

サンタ・メサのスクゥォターは、朽ちかけた木々を集めてトタン屋根を張付けた俄か造りの家ばかりだ。家が斜きだすと、人々は歪んだ木やプラスチックを何とか拾ってきて修理する。しかし、日本のように《使えるゴミ》がどこにでもあるという訳でない。

夕暮れになると、男たちや子どもが集まり《もう使うところが無いゴミ》を線路沿いで燃やす。買い物を終えて少しの魚や野菜を分けあった女たちは、竈に火をいれ始める。子どもたちは楽しみの一つである食事を待っている。パサパサの米と一匹の小魚と僅かな野菜だけの食事を。

家々の側を走る鉄道のレールが、やっと熱さがとれて次第に心地良い座り具合いになる頃、夜の帳が降りてサンタ・メサに星が輝きだす。何もすることが無いかのように、スクゥォターは静寂の海に深く沈んでいく。人々が寝静まる十二時をまわっても、遠く遠くから仕事につけた人の働く音がする。

サンタ・メサの長い夜が明けて、きし



んだバラックに緩い陽が差し始めると、痩せこけた鶏は体をふりしぼって鳴きだす。そこはかとなく家々からささやく女たち、小さな溝に小便やウンチをする子ども、洗濯物を洗い始める老婆たち。家の周りに淀んだ水から蚊がふらふらと舞い上がる。

朝が終わって、今日が日曜日でもないのに男たちは、バスケットボールやバクチに興じている。仕事が無いからだ。

「このサンタ・メサの七割強の人間が失業している。こんな所はマニラ市にあちこちあるよ。約三百万人以上かなぁ」と、男は快活に笑い飛ばす。日本のように、「失業している」とか、「金が無い」とか、「今何時」とか気にしない痛快な人々。

僕が初めて訪れた二か月後の五月に、サンタ・メサの空は真っ赤な火を焦がして家々が壊れた。右翼自警団のビジランテによる放火だった。二千世帯にものぼる人々は一度に家を失った。この人々はどこからどうして、大量に棄てられた木をマニラ市内から見つけることが出来るのだろうか。もうすでにフィリピンの山では樹々が切られてしまっている。

フィリピンを植民地にしたスペインから代替わりしたアメリカは、二十世紀初め頃から機械化によって大規模な森林伐採を始めた。当時の森林面積は、国土の七割を占めていた。それまでのスペイン統治時代は、華僑等が小規模に資力によって切っていた。第一次大戦後、戦火に遇わなかったフィリピンに、デルモンテなどの農事産業に連ねてアメリカの企業が押し寄せたのだ。

日本では、日清・日露戦争後に造船材中心に南洋材の需要が高まり、関東大震災の復興用資材の不足も在って、本格的な南洋材の輸入が始まった。その頃からフィリピンの木材輸出国として第二位となっている。一九三二年頃より、日本ではさらに需要が伸びてラワン合板工業も興って、政府の南進策によって日本企業は木材伐採を手掛けていった。三六年に二・二六事件を起こした日本は、大東亜共栄圏の盟主になる構想のもとに、フィリピン、ボルネオへ津波のように進出した。

戦後の日本は関東大震災の状態と同じく物資不足と、経済復興のための輸出外貨の獲得に、合板輸出に直結する南洋材の輸入を最優先した。フィリピンでは独立法が発効された後でも、一九四六年に森林開発時に米企業が優先されるベル通商法がまかりとおっていた。そこで日本企業はフィリピン企業に機械を与えて、丸太の確保をして買い付け量を増やしていった。アメリカや日本企業に森を薙ぎ倒されて、一九五七年にフィリピン森林局が調査したら、森林面積は四六・五%にも減少している。

朝鮮戦争による米軍特需で合板工業を確立した日本は、高度経済成長で原木確保を重要課題とした。五五年（S三〇年代にはいっても輸入量の約七割を占めていたフィリピン材。

一九六六年、日本では住宅ブームによって、木材輸入は石油に次いで輸入額が第二位となったが、フィリピンでは六八年に森林面積は、国土の三一・四%と激減してしまった。そして、八五年には国

の一八％しか残されていないフィリピンの森林。二十世紀になってからたった八五年間で、フィリピンの森は五二％もなくなった。森を跡形もなく、誰が奪ってしまったのか。土地を奪われ、町からも追われ仕方なく森を開いたカインギンと呼ばれる人々が、森を大規模に壊したのというのか。

フィリピンでは今、村に住む人々もアルサマサやビジランテの放火、虐殺にあい、殆どがその地を捨てて街へでて来ると聞く。マノボ族など先住民たちも土地を奪われ、スラムやアメリカの企業農園のなかに、住んでいる人々が多いのだ。誰が土地を奪って、森を壊したのか。

森を刈り倒し輸出用木材とするフィリピン。それでも対外債務の返済額が増えつづけて、三百億ドル近くに膨れ上がった。だから余計に森を切り倒さねばならないのだろうか。

放っておけば自然に生えてくる森を壊されてしまったフィリピン。ただ何となく、自然の一部分である食物を来る日も来る日も食み、草葺き屋根や岩屋の中でゴロ寝していたろう先住民はどこへ行ったのだろうか。「金を儲ける」、「旨いものを食う」、「地位に付く」などといった欲望も無く、誰の制約も受けず暮らしていた人々はどうしたのか。

しかし今は、ボルネオの先住民のように所有権の概念を持たなかった人々は、フィリピンの山や海から追われ、村で暮らせなくなった人は都市へ流されてきた。その都市で職も無い、金銭経済の仕組に太刀打ち出来ない人々がスクォターやスラムに住んでいる。フィリピンに僅かながら森が残されていても、もはや木造の新築住宅を建てることは出来ない。

日本はフィリピンに何を残してきたのか。禿あがった山か、鉄条網に囲んだ荒れ地か、乱獲してしまった海か、札束で女の乳房を握らせる買春観光か、労働者をレイ・オフする事か、それとも膨大なフィリピンの債務を増やすことか……。掠奪された以上、掠奪し返さねばならない、とふと思うのは僕だけだろうか。いや、掠奪すれば、またどこかが掠奪されるのかもしれない。

昨年の九月、リディアに会って僕は驚いてしまった。一見彼女と思えないように変装していたから。

「NPA（新人民軍）の支持者でもないのに、ビジランテは最近スラムのサポーター、弁護士、労組役員や人権擁護の仲間たちまで生命を狙っているのよ。アキノ政府に智わっても、少しも良くならない。ビジランテによる誘拐、虐殺はマルコス時代以上よ。カパッグの事務所も閉鎖しなければならなくなったの。」と微笑んでいた彼女。

しかし、それから現在までリディアからの手紙は届かない。スクォターを支えるために勤き廻っていた彼女だったが、家計を遣り繰りできないようになって、彼女はとうとうカパッグのメンバーをおりたと、最近風の便りに聞いた。ビジランテからも狙われたため、サンタ・メサでは彼女を守るためのパキキサマ（相互扶助）は域を越えたのかもしれない。

近くにあったフィリピンが、遠く遠く闇の彼方へ流されていく。戒厳令の夜空に僕は何と叫べばいいのだろうか。

"割り箸に思うこと"

米田 佐知子

熱帯林伐採が自然を破壊し、地域の人々の生活を犯しているという問題の一端に私が初めてふれたのは学生時代。国際交流を目的としたサークルの仲間の一人が ある時お箸を持ち歩くようになった。聞くと割り箸を使わないようにするという。"ふ～ん 変わったことするなぁ"と思った。彼が熱帯林の問題についてふれなかったのか、私が 忘れてしまったのか、どうして 彼がお箸を持ち歩くのかは 知らないままだった。

テレビのニュース番組の中で 割り箸工場が 出ていたことがあって、なにげなく見ていたら 木の切れ端等を機械にポンッとほうり込むと割り箸ができあがってくる そんな様子が目に入った。それを見ていて割り箸って もったいないけど有効に木を使って作られているから良いものなんだなぁ と感じてしまった。お箸を持ち歩いていた彼のことを思いだして、なんだか無意味に思えてきた。

開発援助の間違った使われ方として熱帯林伐採道路の事を聞いていて、熱帯林伐採の問題に興味を持ちつつあった。そして、フィリピンへ行って、自然のままの木の少なさを見て驚いてしまった。帰って来て、とにかく熱帯林に関する情報を集めた。割り箸の事も実際のところ有効な木の使い方なのかどうか。自分の身の回りで木がどのように使われているのか。割り箸については わざわざ割り箸用に木を切って加工し輸出しているところがあるという。必ずしも有効に利用しているということではないらしい。とりあえず、できることから行動に移していきたいと思い、私もお箸を持ち歩くことにした。

お箸を持ち歩く事でいろんな人と熱帯林伐採の話をする機会をもてた。お箸を持ち歩くことを偽善だという人もいる。私自身 以前は 無意味だと思ったことがあるし・・・・。ある人がこんなふうに私に言った。「割り箸のルーツはよく知らないけれど(知っている人、教えて下さい)昔からの日本の持つ割り箸文化を否定するのは良くない。」けれど、その文化を守っていくことで木がなくなってしまうのならそういう文化にこだわるのは保守的すぎる気がする。だからといってお箸をやめて ナイフ、フォークにするというわけじゃなく、「割り箸文化」ではなく「お箸文化」は守りたい。新しいライフ・スタイルの確立なんていうと大袈裟かな。一過性のブームは厭だけど、お箸の持ち歩きがブームになって定着したらいいなと思う。今のお箸箱って大きすぎるものが多い。女の子が持つ小さなバックには入らない。どこかのメーカーでお洒落なコンパクトなお箸箱とお箸を多種類つくってくれないかなぁと待ち望んでいる。

国産材と外材の間

―高槻森林観光センターを訪ねて―

*高槻森林観光センター：高槻市大字田能小字的谷2番地
☎0726・88・9400

「このログキャビンの丸太は、全部舞鶴から上がった外材です」
北河守所長の言葉を聞いて私は思わず唸ってしまった。（田中淳夫）

ここは高槻市森林観光センター。470haの森林を持ち、その45%が人工林というレッキとした林業地である。そこでさえ国産材は高すぎてログキャビンなどには使えないという。日本林業をめぐる問題の根の深さを感じさせられた気分だった。

2月5日の日曜日、総勢11人のメンバーは、このセンターに朝から出かけた。そこはJR高槻駅から車で約30分の距離。大都市近郊の林業地としていろいろ新しい試みを行っているから勉強になるという名目だが、ホントのところ暗い部屋でボソボソと話ばかりしているより健康的でええやん、という程度の発想だ。

もっともメンバーは、普段の会合では一向に見かけない人や、山に行くのにパンプス履いてくるおねえさん（川を渡るのは大変でしたね、米田サン！）もいたりして、なんだかミョーなグループだった。

駅前よりそれなりに都会の高槻市街をバスで北上すると、突然、深山奥深くに来たような景色に変わり、やがてセンターに着く。まず槻の郷荘で昼食をとった。その後北河守所長にセンターの概要と、現在の日本林業について話してもらったのだが、その冒頭に出たのが、先の言葉である。

そもそもこのセンターは、森林組合が林業構造改善事業の補助金により作ったもので、木材生産一本やりから観光にも力を入れ出した最初だという。

温泉も湧き、宿泊所のほかキャンプ場や木工クラフトセンター、バーベキューガーデン、しいたけセンター、薬草園、くり園などなど多くの施設も作られた。おかげでレクリエーションの地として人気を呼ぶ。

その結果、雇用の創出や現金収入の増加、特産物の普及などの効果が生まれてまずは順調のよう。全国各地から見学者もあとをたたず、成功した森林組合として注目されているようだ。

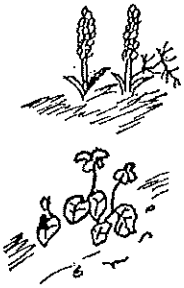
それにしても、値段の安さは少々意外だった。いわゆる観光地値段は全然なく、入園料も取らない。しいたけ狩りをしても、100g200円だから食べきれないほど買った人（1人暮らしでしたよね、牛島サン！）もいる。これでセンターを維持しているのかと思うと、倹約という言葉が失礼な気分になった。

またセンターでは、トンカチ号なる車に木工クラフトセットを積み、各地で木工教室を開くなど教育的活動も行っているという。長期的視野で国産材普及運動まで行っているとは、なかなかすごい。それでもログキャビンに外材を使わざるを得ないのが、日本林業の現状なわけだが…。

熱帯林伐採問題を突き詰めていくと、一つは国産材の問題に行き着くことがこんなところからでもわかってくる。現場を訪れると、知識としては知っていても身についていないそんなことがはっきり見えてきた。

現在の林業で将来性ある事業は観光だけというのでは寂しすぎる。結局日本の森林を守ることが、熱帯林ひいては地球の環境を守ることにつながると言うことを改めて強く感じた機会だった。

また野に出よう。きっと「知る」ことから「感じる」ことに進歩できるにちがいない。



お暇申し上げます
署名用紙 遅れてごめんなさい。
少数ですが カンパと共に お届けします。
先日 友人の紹介で 来られた 山本恵次さんが
この運動をなさっている 事と お知り合いを聞きました
外国に 牛乳パックの再利用について
それによって 森林が少しでも助かると聞いて
知り合いの若者と少しづつ 集めて その輪を
広めていこうとおりますけれど 何を申しましても
素人のすることで、どこへ連絡してよいものやら
見当つきません。事務局 どの方にすればよろしか
お教え下さい
ようく お願い致します。

合掌
柴田秀生

日本企業の乱開発：

＊パプア・ニューギニア／P・ニューギニア政府は、森林開発に投資する者に対して、植林を義務付けて被害が生じた場合に保証する約束をしているが、この約束は一切守られていない。（伊藤忠商事・本州製紙）

＊タイ／ パルプ・チップのために成長の速いユーカリを王子製紙、大昭和製紙など15社が植林。土地の取り上げ環境破壊が問題となっている。

＊ブラジル／ アマゾン横断道路や農場建設に日本政府が加担と米議員が批判。欧米がブラジルに道路建設を奨めたのであるが、日本も資源開発や伐採のために企業が進出している。中曽根政権下での開発援助金を最大に支出しのは、ブラジルである。ここでは一年に四国の面積の森が消えているという。

二月二〇日よりインディオがダム建設反対集会を行った。

＊インドネシア／ ジャワ島では日本世銀等の借款でケドンオンボ・ダムがほぼ完成。八千人の家が水没するため住民、学生が政府に抗議。

ウータンからのお知らせ

学習会＊　隔月ごとに読書会と野外学習会を行います。

3月18日（土）読書会　／自然連合事務所　午後7時
4月9日（日）野外学習会／吉野(?)集合午前9時；近鉄アベノ駅改札口
5月13日（土）読書会　／自然連合事務所　午後7時
6月11日（日）野外学習会／場所は未定

編集子より～　編集会議は3～5名ほどで月の初めに行い、原稿〆切は中旬、発行は月末予定です。皆さん、編集会議はオープンですから、参加して下さい。　それから、みんながらの原稿もお待ちしています。

編集後記

二月末に、ラオスで三井物産の所長が何人かに誘拐された。三井物産側によると、「当社は何もねらわれることの理由がないし、本人はうらみを買うことも何もない」と。ところがどっこい、ギッチョンチョン。日本がラオスへODA援助金を拠出した額に比べ、「誘拐事件」の捜索金がその四〇倍も使ったという。

タイやラオスで森林破壊が進み、北部の伐採輸出を三井物産が一手にひきうけていたという。その地に住んでいる少数先住民は、このことをどう思っているのだろう。

犯人は少数民族のメオ。との新聞の見だし。彼らもたぶん、この森林破壊者をよく思っていないだろう。しかし、フィリピンで若王子事件があった時に、「新人民軍が誘拐した報は誤りで、警察官だった」というように、ニセねたが差別、抑圧のもとになるのではないか。

（西岡）

3月10日、会報7号の印刷の日朝から8、印刷機の具合いが悪いとの連絡、とりあえずできる分だけ、堺市役所でということで、編集作業を市役所の机で……。思いもよらないできごとでした。3月のこの時期、役所の皆さんは忙しいのですね！！！

仕事中　おじゃまさしてしまいました。

どうもすみませんでした。……

事務所の机で作業をしているとなんか仕事をしているようで嬉しいなぁ。2人だけでは、作業はみんなでワイワイやりたいな。

P.S. お知らせ。
5月の連休・屋久島ツアーを計画しています。
興味のある方は、予約の手配、屋久島のみ・勉強会等も考えてますので、3月中に"ホム"(鈴木)まで連絡下さい。(5/2～5/6のあたり…予定)
(TEL：0727-28-3660)

できるだけ安にして下さい。